

# 相互理解に基づく接続を図り 高大が本来の教育を取り戻そう



筑波大学アドミッションセンター教授

## 大谷 奨

おおたに・すすむ

1963年生まれ。筑波大学大学院教育学研究科博士課程中退。摂南大学、旭川医科大学などを経て2006年から筑波大学アドミッションセンターに勤務。博士（教育学）。専門は教育制度学、特に中等教育制度史、大学入試制度論、学校設置者論など。

大谷奨教授は、高校と大学がそれぞれ教育の本分を全うし、相互に理解、信頼し合うことによって、生徒・学生の成長につながる接続が実現すると述べる。主体的な活動を評価する筑波大学のAO入試を例に引きながら、学びへの意欲を育て、評価する教育と入試のあり方を語ってもらった。

## 機能が低下した 「交通整理」としての入試

まだ大学が「狭き門」であった時代、多数の受験生を効率よく選別するには学力を目安にするほかに、入試難易度は入学者選抜における「交通整理」の役割を果たした。

大学への入学志願者全員を厳しく選抜する必要性が低下した今、学力のみによる選抜はむしろ、目標を持たず意欲に欠ける学生を抱え込むリスクさえ生んでいる。学力に加え、大学における学習への期待、意欲といった多面的な要素を問う入試を適切に実施することにより、大学はより自学に合った人材を受け入れ、教育や研究を活性化する可能性を持つ。

達成度テストの検討が進む現在は、多面的な評価を取り入れる絶好のタイミングだと考えている。言語活動の充実により思考力やコミュニケーション

力の向上を図る新学習指導要領、身に付けた知識や技能を社会生活でどれだけ活用できるかを問うPISA型学力など、多面的な評価になじむ教育や学力観が浸透してきている。一方で高校と大学で進路指導や入試制度に責任を持つ世代である50代の教員は、小論文や面接が比較的多く課せられた時期に大学入試を経験し、多面的な評価に一定の理解がある可能性が高い。

ただし、懸念もある。日本では過去にも学力以外の評価を重視しようとした時代があった。それがなぜ定着しなかったのかを検証しないまま多面的な評価による接続をめざしても、結局はまた学力偏重に戻るのではないか。

また、時代の要請だからといって無分別に多面的な評価を導入するのではなく、専門分野の特性によっては、学力評価とのバランスを考慮する必要がある。工学に数学や物理の学力が欠かせないように、累積的な学びを必要と

する分野では、土台としての学力をある程度重視するのは当然だ。

## 「入試」と絡めず 科目のおもしろさを伝授

高校と大学の教育に連続性を持たせるには、互いの教育に対するさらなる理解が必要だ。高校は、入試の内容から大学が要求する能力を推し量ってはいるものの、入学後に求められる能力まではわかってはいないと思われる。大学は、学習指導要領の内容は理解しているが、高校での具体的な学びや、それに対応する入学後の引き継ぎ方をあまり考えてこなかった。相互理解が進めば、高校と大学それぞれの教育を通して何を培い、何を接続させるべきか、自ずと導き出されるはずだ。

高校の教員には、入試や試験という言葉を使わずに科日本来のおもしろさ、深みを生徒に伝えてほしいと思っ

【図表】筑波大学アドミッションセンターが実施する入試

アドミッションセンター入試（AC入試）	主に自己推薦書（2年以上かけて自ら取り組んだ学びについてまとめる）の内容と、それに関する面接・口述試験によって、問題解決能力や入学後の学習に必要な適応性などを判定する。
国際科学オリンピック特別入試	国際科学オリンピック出場経験者もしくは代表者選考会において一定の成績を取った者が対象。明確な目標を持って計画的に学ぶ意欲、入学後の学習に必要な適応性などをエントリーシートと面接で判定する。
国際バカロレア特別入試	学類が指定した科目を履修して国際バカロレア資格を取得した者が対象。面接・口述試験では、EE（課題論文）、TOK（知識の理論）、CAS（創造性・活動・奉仕）の学習成果、入学後の学習に必要な適応性などを見る。

ている。現状の高校教育は、大学入試の突破を目標に、知識を詰め込むための教育と化していないか。高校の本来の役目は、入試の有無にかかわらず、授業を通じて学問や社会に対する興味、関心を高め、主体的に学ぶ姿勢を育むことにあるはずだ。中高一貫校の中学校段階の教育がそのヒントになる。「高校入試に出るから」ではなく、「なぜこの科目を学ぶのか」を説き、生徒の意欲を高めようとする姿勢が求められている。

大学入学実績によって高校が評価されるという現実があり、こうした理想の実現は難しいとは思いますが、だからといって開き直っていい問題ではない。忸怩たる思いで奮闘している高校教員を、大学として応援したい。

一方、大学は、高校で培われた学びへの意欲を評価して学生を受け入れ、彼らの期待に応える教育をすべきだ。

高校生に対しては、出前授業やオープンキャンパスで大学の学びの楽しさを伝え、意欲、期待をかき立てたい。時には自学を広報する意識を捨てて、高校生の進路観を耕す目的に徹することも必要になるだろう。

受験者に過度な負担を強いる入試は、入学をゴールと勘違いさせやすく、その後の学び続ける意欲を削ぐことにもなる。受験に至るまでの姿勢や継続的な取り組みを評価する入試なら、高校生活で膨らんだ「もっと学びたい」という期待と意欲を、大学がそのまま引き継ぐことができる。

入学後は、入試で評価した点を伸ばすべく、個性の高いカリキュラムを設けるのが理想だ。学力に評価の力点を置いた一般入試合格者と、期待や意欲を評価したAO入試の合格者には、別のポリシーに基づく教育プログラムや成績評価が用意されてもいい。

多面的な評価を導入するには評価方法の検討、精度の向上が欠かせない。高校生に対する啓発活動も、カリキュラムの個別化も、相応の準備や体制が必要だ。高校側も、入試を目標とせず、科日本来のおもしろさを伝える教育を行うには、指導技術の向上、指導時間の確保など、課題は多い。しかし、高校と大学それぞれの都合を承知したうえで、本来なすべき教育の優先順位をいかにして上げるかを、私たちは問われている。

## 入試制度を通じて 高校の取り組みを支援

私が所属するアドミッションセンターは、3つの入試を運営している（図表）。いずれの入試も、探究心、積極性、主体性に富む人材を求めている。それらを個人の取り組み・研究で培った者を「アドミッションセンター入試（AC入試）」で、特定の科目で培った者を「国際科学オリンピック特別入試」で、学校で培った者を「国際バカロレア特別入試」で発掘する。いずれも大学が直接、学力を検定しない。しかし、自身の学力や適性を理解して努力を重ねた「強い個」を持つ者のみが合格できるという、一般入試よりハードな面もある。

3つの入試が重視する問題発見・解決能力、国際バカロレア特別入試が求める国際性は、本学が開学時から育成をめざしている教育目標だ。高校時代の取り組みと、入学後の教育が相乗効果を上げることが期待している。一般入試合格者とは資質が異なる学生の存在によって、刺激を与え合う環境を生み出すのも狙いの一つだ。

入試制度の新規導入には、新たな教育の流れを応援するという側面もある。2009年度から実施している国際科学オリンピック特別入試は、入試とは関係なく生徒と一緒に理数科目に真剣に取り組んでいる高校教員を、2015年度が初回となる国際バカロレア特別入試は、探究心を持って現代社会の課題に立ち向かう力を育成する高校を後押しする意図がある。これらの入試の周知を含め、今後も積極的に高校教育に働き掛け、あるべき接続の実現を図るつもりだ。（談）

## 学力ではなく継続的な学びを評価——筑波大学のAC入試

一般入試では測ることができない問題発見・解決能力を持ち、得意分野にまい進できる人材の獲得を目的に、筑波大学が2000年度から実施している多面的評価・AC入試の概要を紹介する。

### 面接で受験生が目を輝かせる入試

筑波大学のAC入試は、自主研究など志願者が高校の授業以外で取り組んでいるテーマについてのレポートや作品等を書類審査する第1次選考と、30分程度の面接を個別に行う第2次選考から成る。

全募集人員のうち、AC入試の定員は約2%。合格にふさわしい志願者が少ない場合は定員を充足させず、一般入試の定員にまわす。「どんな逸材がいるかは募集をしてみなければわからない。結果的に定員を満たせなくて

も、枠は広げておきたい」と大谷教授は話す。趣旨に共鳴し募集人員を増やしてきた学類がある一方、「入学後の学習方法と相性がよくない」「推薦入試の合格者と資質が重複する」などの理由で募集を止めた学類もある。

面接では、多くの志願者が目を輝かせながら研究テーマについて話すという。自分が没頭する研究のレベルの高さを理解してくれる人が周囲にいるケースは少なく、その分野に造詣が深い教員と議論できることに喜びを感じるようだ。ある志願者は、一般入試で合格できる学力があるにもかかわらずAC入試を受験した理由を、「自分が

取り組んできたことを認めてもらえる入試を受けて入学したかった」と語ったという。

### 入学前の意欲を引き継ぐ研究者体験制度を実施

自ら学ぶ意欲を評価することから、アドミッションセンターは、リメディアル教育を課さず、学力を指標とした効果測定も行っていない。面接時の教員からの指摘をふまえた研究のまとめ直し・継続を促すことが入学前教育になっている。この入試の効果測定の指標としては、優れた実績を挙げた学生に授与される学長表彰、自然科学系の研究コンテスト「サイエンス・インカレ」の受賞実績などを使用。学長表彰を受けるのは全学生の約4%で、うち約30%をAC入試合格者が占めている。合格者の学力には幅があるが、専門分野への意欲を転化して基礎学力の修得に励む者も少なくない。

アドミッションセンターは合格者に、2013年度から全学群の1～3年生を対象に実施している「先導的研究者体験プログラム」の利用を勧めている。研究計画書を提出して費用を申請し、採択されれば自主研究を行える制度だ。利用者の約40%をAC入試合格者が占めている。「合格者の資質に合った個別性の高い教育プログラムの実施によって、AC入試が一步前進できた」と大谷教授は述べる。

AC入試のアドミッションポリシーと志願者の取り組みのテーマ例（抜粋）

実施学群／学類 アドミッションポリシー	取り組みのテーマ例
<b>人文・文化学群／人文学類</b> 人文系の学問に関わる専門的知識を主体的に吸収し、自己の判断力を磨いていく能力と創造的な問題解決能力を有する人材を選抜します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>考古学研究とその視点—下野型古墳の形態</li> <li>今に生きる庚申信仰</li> <li>戦時下の弾除け信仰の隆盛と衰退</li> </ul>
<b>生命環境学群／生物資源学類</b> 生物資源及び関連事項に対して強い興味と問題意識を持ち、自ら問題を発見し解決に取り組む能力と、それを他人に伝え論理的に説明する能力、そして生物資源に関連する基礎学力と学習意欲を持つ人材を選抜します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ピロールの電解重合</li> <li>国内飼料自給率改善とシステムの活用を目指して</li> <li>クズの生態系内における異種個体群の関係</li> </ul>
<b>理工学群／社会学類</b> 数学と外国語の基礎学力を有し、社会システムについての問題を発見・解決するまでの一連の活動を意欲的かつ主体的に行うことのできる明確な目的意識と勉学意欲を持つ人材を選抜します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>津波被害と減災に関する多角的調査研究</li> <li>地方都市再生問題の事例研究</li> <li>都市部における電線類地中化を考える</li> </ul>